



私だって  
恋心  
がしたい♡♡

茶川由卯の場合



さがわ ゆう  
茶川 由卯

- ・周りと比べて地味な見た目だと自負しているが特に気にしてない。
- ・自称モブ顔
- ・腐れ縁の幼馴染がいる。何事もゆるーくやっている。
- ・Hな話が好きで、男子相手でもする。それが原因で男子からHな目で見られていることもない。
- ・幼馴染から好かれているが、全く気づくそぶりはない
- ・その間に着々と外堀が埋まっている。

「いやわかる、あれめっちゃエロいよな。」

「いや、わたしだってね、恋の一つくらいしてみたいんだよ〜。」

「ほんとにするつもりなのか!? 私だぞ!?!」

## 主人公

- ・由卯の幼馴染。小さい頃から一緒である時期から由卯のことが好き。
- ・恋愛話が出る度に由卯に好きだと言っているが一度も気だと思われた事はない。
- ・周りの友人に協力してもらって気づかせようともしてみたが、空振りに終わっている。



恋心  
私だって  
がしたい♡♡

茶川由卯の場合



冒頭サンプル



今日も今日とて俺は、幼馴染である  
茶川 由卯(さがわ ゆう)の部屋で遊んでいた。

家が隣で小さい頃から一緒なせいで当たり前のように  
お互いの部屋に入り浸っていた。



「いやー最近あれだね、恋愛話が多いね。」

「そうか？」

「ほら、史香ちゃんも付き合い始めたし、委員長だって彼氏できたじゃん。」

部屋で遊んでいたら唐突にそんなことを言い出した。由卯はよく、応援している友人の恋愛話をする。



「へーそうなんだ。」

「そうなんだよ、しかもあの黒葉さんも  
男の子と歩いてたらしいんだよ。」

「まじ？誰かと居るの見たことないわ。」

「でしょ？いや、まじで意外だったわー。」

意外なところの話も挙がるけど、一体何が言いたいんだ。





「それで？一体何を言い出すんだ？」

「いやー私も恋をしてみたいなーって思ってるね。」

「なるほど、いや、俺がいるじゃないか。」

「はいはい、もう何度も聞いたよ。」

そう、幼馴染のあいつはこの手の話が挙がるたびに『好きだ』とか言ってくる、だが今回は違う本気なんだ。



「今回は本気なんだよ。」

「俺は毎回本気のつもりだぞ。」

「ふーん？それなら押し倒すくらいの気概は  
見せて欲しいもんだな。」

「言ったな？」

そうするとアイツは立ち上がり、私に詰め寄る。



「おい、ちょっと待て、本気か!？」

「本気かどうか示せていたのは由卯だぞ。」

「ちょちょ、ちょっ!？待て待て待て待て!？」

そう言ってもアイツは止まらず、詰め寄ってくる。

そしてアイツは私をひょいと抱えて、

後ろのベッドに押し倒した——



「ちょ、ちょっと待てっ!!」

「うん?何?」

「いや、何?じゃない、ほんとにするつもりなのか!?!」

私がそういう間もアイツはスルスルとスウェットの下を脱がしていく。  
いつもの軽口のつもりだったのに、えらいことになってきた。



「私だぞっ!?!」

「わかってるよ。」

ここまで焦っている由卵はあまり見ないからなかなか新鮮で面白い。  
だがいまだに信じられないようなのではっきり言っておいた方がいいかもしれない。



「そうしないと本気にしないっていうなら俺はそうする。」

「おまっお前まさか、今までのも本気だったのか!？」

「うん。」

アイツは当然のように言い切る。今までアイツが言う『好き』とかは全部冗談だと思っていたしかし、どうやら本気だったらしい。



「わかった、わかった。い、良いけど、ちゃんと準備してくれ。」

「え、ああ。そうか、焦ってたわ。」

「ええっと確か……。」

いきなりだったし、つい先走ってしまったがそうだよな、ちゃんと濡らさないといけなかったな。  
確か由卯の部屋にはあれがあったはずだ。



「確かこの辺にローションあったよな。お、あったあった。」

「おおい!?なんで知ってるんだよ!?!」

「お前だって俺のエロ本の場所知ってるだろ?」

私が隠していたエログッズの中からアイツがローションを取り出す。  
いくらしょっちゃん来てるとはいえ、そこまで知られているとは思ってなかった。






「あれだろ？箆笥の、タオル入れてある段の一番奥だろ？」

「じゃあ、おあいこってことで。」

「え、そうか？」

そんな会話をしながらアイツはローションの蓋を開けて自分の手に広げ始めた。



手に取ったローションを由卵のお〇んに塗る。  
初めて触る幼馴染のお〇んこは想像以上に柔らかくて驚いた。

「ん♡冷たっ。」

「うお、柔らかっ」

「ん♡んっふうっ♡ん♡」



「おお、これはすごいな……。」  
「んあ♡あっ♡も、もう大丈夫だからっ」  
「ん？そうか？じゃあ、っと。」

もう良いらしいので残ったローションは自分のちん〇に塗った。  
これでお互いに準備はできた、いよいよ由卯との初めてができるんだ……。



「じゃあ挿入れるぞ。」

「ああ、ん♡んっ!!いったあっ!!」

「う、おおっ大丈夫か?」

由卯が顔を歪めて痛そうにする。初めては痛い聞いていたけど、やっぱり痛いんだな。俺はとりあえず動かずにそのまま待つことにした。

「いや痛い。まじで痛い。『うん。動いていいよ♡』とか言う余裕ない。」  
「まじで痛そうだな。」  
「いやほんと、こんなに痛いとは思わなかったわ。」

あまりの痛さに早口で捲し立てる。漫画とかじゃすぐに動いたりしてたけどこれは無理だろ。  
ここまできてお預けもできないけど、痛み引くのか……？



それからしばらく挿入したまま痛みが引くのを待ってもらった。  
そうして何とか、いやまだ痛いけど、何とか動いても大丈夫そうな程度になった。

「た、多分もう大丈夫だと思う……。」

「本当に大丈夫か？」

「……また明日とかでもいい？」



「いやそれは無理。」  
「あ、こらっあ♡んあっ♡」  
「こここまでやって我慢できるかっ」

勝手に腰を振り始める。さっきほど痛がってはいないし文句を言うくらいには余裕があるようだ。それなら大丈夫かと由卯の表情を気にしながら続けることにした。

「ん♡くっんんっ♡んう♡」  
「由卯、大丈夫そうか？」  
「んんっ♡まだ少しっ、でも大丈夫だ。っくうっ♡」

実際さっきよりも痛みは引いてきた、まだヒリヒリするけどちょっとずつ気持ち良くなってきた。  
ローションでぬるぬるとしたちん〇が出入りする感覚はなかなか悪くない。





「んうっ♡ん、お前はどうか？気持ちいいか？」  
「ああ、最高だ。めっちゃ気持ちいい。」

由卵が俺に具合を聞いてくる。珍しくしおらしい態度で何だかいつも以上に可愛く見える。オナホなんかも使ったことはあるけど、比べ物にならないくらいに気持ちいい。それに、単純な刺激以上に由卵としているという嬉しさも相まってまさに最高だった。



「あっ♡そうか、それは良かった、んあっ♡」  
「もしかして由卵も気持ちよくなってきてる？」  
「ああ、なんかだんだん、あっ♡ん、ああっ♡」

さっきまではじんわり気持ちいいくらいだったが、それが徐々に全身に広がって、今はひと突きごとに快感が全身に広がって喘ぎ声が漏れるようになった。



「そうか、なら遠慮はいらないな。」

「なあっ、ちよっ♡んうっ♡ああっ♡あっ♡」

よくなってきたとわかるやアイツが激しく動き出す。  
もう痛みもなく、激しく動かれるとその分快感が襲いかかってくる。  
激しくすればいいもんじゃないとは聞いたことあるけど、私はそれでいいみたいだ。



「おお、さっきより締まるっ」  
「んああっ♡ほかっ言うなあ♡あ♡」  
「お、もしかしてこの辺がいいのか？」

由卯の反応を見ながら動いていたが、どうやらお〇んこの入り口あたりにいい所があるらしい。  
それならと俺は入り口に擦り付けるように突いてみることにした。



「んんっ♡ん、んん〜〜♡♡」

「おお、締まる締まる。」

「ん♡くっ、んんっ♡」

やっぱりあっていたようで突き方を変えたら突くたびに締まっていく。  
だが気持ちいいのは俺にとっても同じことで、もうそろそろ限界が来そうだった。



「んあっ♡あっ♡ああっ♡んんっあっ♡♡」

「由卯、もうすぐイキそうか？」

「あっ♡ああ、もうイクっ♡んああっ♡」

オナニーするときに弄りすぎたのかお〇んこの入り口周りを責められると弱いみたいで、それにアイツが気づいてからずっと感じっぱなしで私はもう限界だった。



「俺も、もうイクからっ」  
「おっ♡んあっああっ♡早くしてくれっ♡」  
「ああ、もうイク、由卯っ!!」

—一気に腰の動きを早め由卯のお〇んこに思いっきり突き入れた—



「んあぁっ♡あぁあぁあぁあぁあぁあ♡♡♡」  
「いくぞ由卵、由卵っっ!!」

アイツが思いっきり突き入れて射精する。  
オナニーとは比べ物にならない快感が、一気に爆発したような絶頂だった。





「はっ、はあ……はあ……ふう。」

「はあ……はあ……ああ……。」


「あー気持ちよかった……。」

ものすごく気持ちいい射精だった……普段オナニーする時はオナホを使ってもここまでにはならない。セックスってすごいんだな。



「ふ、ふいふん、童貞卒業おめでとう。」  
「ふっお前の処女はいただいたぜ。」  
「怪盗かよ。」

射精して満足げなアイツを茶化す。いやーしかしついにヤってしまったな。  
いつかノリでとか、魔がさしてとかはあると思ったけど、こういう流れできたかー。



「ところで由卵さん。もう一回いいかい？」  
「ふふん、私のお〇んこはそんなに良かったか。」  
「はい、最高でした。」

お恥ずかしながら、イットと言うのに全く治らない。由卵にもイジられる始末だ。  
セックスを覚えたての童貞感マシマシで恥ずかしいが仕方ない、正直に言うことにした。



続きは本編で